



指定討論 糸賀(1968)「ミットレーベン」を踏まえて (資料)

國本, 真吾

(Citation)

日本特殊教育学会第56回大会(2018大阪大会) 自主シンポジウム1-18 糸賀一雄の「最後の講義 : 愛と共感の教育」を読み解く

(Issue Date)

2018-09-22

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006485>



指定討論 糸賀（1968）「ミットレーベン」を踏まえて

指定討論者：國本 真吾（鳥取短期大学幼児教育保育学科、kunimoto@ns.cygnus.ac.jp）

●故郷・鳥取での没後50年の取組み

糸賀一雄先生（1914-1968、以下敬称略）の生誕の地である鳥取県では、4年前の生誕100周年の際に、第14回全国障がい者芸術・文化祭「あいサポート・アートとっとりフェスタ」が催された（2014.7.12-11.3）。その関連イベントとして、開幕100日前に「糸賀一雄生誕100周年記念フォーラム」（4.12）を、フェスタのクライマックスイベントで「糸賀一雄顕彰イベント」（11.1）を実施した。そして、没後50年にあたる今年の企画は、鳥取県社会福祉協議会が行っている福祉教育・学習の推進事業として、「糸賀一雄没後50年 鳥取の福祉を考える～ともに生きる 福祉セミナー～」を2018年9月12日に実施した（別添チラシ・新聞記事参照）。この日は、1881年に島根県から今の鳥取県が再置されたことに因んで、「とっとり県民の日」として様々なイベントが実施される。幸いにも、セミナーの開催に際して鳥取県立図書館が会場使用とともに、糸賀の企画展示「とっとり県民の日記念企画・障がい福祉の父 糸賀一雄」を計画することとなった（2018.9.12-10.10）。

没後50年セミナーは、郷土の偉人を単に顕彰する形で終わるのではなく、50年前に途切れた糸賀思想の継承・発展を意図して構成することにした。例えば、生誕100周年の際に滋賀県で刊行された『糸賀一雄生誕100周年記念論文集・生きることが光になる』において、河合隆平氏は「糸賀の思想を現代に生かそうとする私たちに求められるのは顕彰や落穂拾いの作業ではない。また、糸賀たちの生きた時代の単なる復元でもない。糸賀の思想を現代に生かすという事は、私たち自身の思想と実践において糸賀と『対話』しながら、日常に埋もれている事実や思想に形を与えていくという想像と創造の作業」（p.146）と述べた。また、蜂谷俊隆氏は「糸賀の残した思想を無批判に受け取るだけではなく、思想形成の軌跡に学びながら、果たせなかった展開についても視野に入れていく必要がある」（p.255）と述べている。これらの指摘にも学びながら、糸賀思想が50年前の段階で完成したものにとらえず、糸賀ならその先の未来をどのように展望し、またその思想を発展させたかという発想に立って、セミナーの基調講演及びパネルディスカッションを構成した。

●「ミットレーベン」をめぐる

糸賀が故郷で行った最後の講義（1968.1.18、@鳥取県立皆成学園）を編集したものが、2014年の顕彰イベントで発行した『ミットレーベン～故郷・鳥取での最期の講義～』である（絶版。鳥取県HPからダウンロード可能 <https://www.pref.tottori.lg.jp/247318.htm>）。「ミットレーベン（mitleben）」はドイツ語の造語で、糸賀は「ともに暮らす」と講義におい

て紹介している。しかし、この語は糸賀の著作等では一切記述されていない。糸賀の共感思想を読み解くにあたり、このmitlebenは非常に重要な言葉だと考えている。

3年前の本学会自主シンポジウムでは、講義録『ミットレーベン』の読み解きを行ったが、その際に富永健太郎氏が糸賀の講義ノート（1964）のメモに“mitleben”の文字が書き込みされていることを報告した。富永氏によると、レオ・カナリーが1900年以降の米国児童精神医学の発展過程を10年単位で整理したものを糸賀が講義で触れる箇所に、“mitleben”の語が書き込まれている。即ち、(1)子どもたちについて考える（about）、(2)子どもたちに対して行う（to）、(3)子どもたちのために行う（for）、(4)子どもたちとともに（with）という4段階でカナリーが整理したものであるが、糸賀は“with”の語に下線を引き、“mitleben”の語を書いている。この4段階は、糸賀が編者として執筆した『施設養護論』（1967、ミネルヴァ書房）でも詳しく触れられているが、そこには“mitleben”の語は登場していない。2009年に再編集された『糸賀一雄の最後の講義—愛と共感の教育—[改訂版]』（中川書店）には「最後の講義」の資料が収められているが、この4段階がメモ書きとしても糸賀が書き加えていることが確認される。ただし、そこにも“mitleben”の語はない。

●「ミットレーベン」を中核にした社会へ

“mitleben”を巡る謎は一旦置いて、「最後の講義」のメモ書きにおける4段階の箇所は、糸賀が倒れた際に口にしていた「この子らを世の光に」の先に用意されていた内容である。講義が最後まで続いていたなら、どのように話していたのかが気になるが、この4段階に関わり先の講義ノートで“with”の語に“mitleben”が書き加えられているところに注目したい。糸賀が亡くなった頃、近江学園は創立20余年である。近江学園そして糸賀の歩みを、単純だがカナリーの4段階に重ねてみると、toからforへの時期となる。forの時期に向けて、糸賀の「この子らを世の光に」の語が生み出されていることになるが、その先のwithを糸賀はどのように位置づけようとしたのか。withは「ともに暮らす」とあるが、そこに糸賀はmitlebenを結びつけている。「立派な生産者」として認めあえる社会が、仮に「この子らを世の光に」という「新しい社会」の在り方であるならば、その先には子どもたちと「ともに」その社会を発展させていこうとした絵も掛けよう。このことから、安易だが「この子らと世の光に」という言葉が想像される。「ともに暮らす」ことでのmitlebenな経験が、期待される社会の在り方を導く出発点となるだけでなく、人生の目的としても位置づけられていたと読み解くこともできよう。